

審査の結果の要旨

氏名 榎本 渉

本論文は、9～14世紀の東シナ海域史を「海商の時代」と特徴づけ、その中心をなす日中間の交流の姿を、「宋代市舶司貿易体制と日宋貿易」「日元交通の展開」「人的交流の諸相」の3部に分かって論述する。遣唐使廃止と勘合貿易開始には含まれたこの時代は、日中交流陥没期のように思われがちであるが、近年の諸研究は多様な交流の姿を明らかにしつつある。そうした動向のなかで、本論文は、制度的背景を十分に踏まえながらも、「人的交流」を前面に推し出すことにより、貿易や文化交流をなま身の人間の営為として描き出すことに成功した。

また、徹底的な史料の博搜により、森克己の古典的研究以来停滞気味だった日宋・日元の貿易・交通研究のレベルを、大きく塗りかえた。全編にわたって、禅宗史料を中心に僧侶の往来を示す史料を余さず収集し、先行学説にするどい批判を加えた。とくに、日本史研究の立場から、中国側の詩文集や地方志をこれだけ利用した業績はかつてなかった。一方、縁起・語録・抄物など日本側史料についても、従来利用されていなかった素材を多く発掘している。引用した史料にはかならず読み下しを付けた点も高く評価しうる。

以下、本論文の目覚ましい成果としてとくに注目すべきものを列挙する。

①日中交通の媒介者となった貿易関係者の実体について、「日本商人」「倭舶」等の史料上の表現に徹底した批判を加え、利益獲得のための最適行動という観点から、日本（とくに博多）に拠点をもつ中国人海商のプレゼンスの大きさを浮かびあがらせた（第一部）。

②従来一般的に盛んだったと言われてきた日元交通について、時期を細かく区分して、戦争や国家側の動向とからんだその盛衰を解明し、従来知られていなかった史実を豊富に提示するとともに、初めて詳細な通史的叙述を行った（第二部）。

③「人的交流」の具体的な姿として、弘安役の宋人捕虜、元明交替期の亡命中国人の事例や、中国に渡航した日本僧の身分証明や意思伝達手段の具体的方法を、従来使われていない史料も活用して描き出した（第三部）。

④国家を超えた地域に着目する近年の研究動向を踏まえつつも、国家をも地域の一つとしてとらえ、国家による管理・保護をも地域交流の重要な構成要素として位置づける、という理論的な見通しを打ち出した。

本論文を構成する各章の多くは、すでに個別論文として発表され、学界に議論を呼んできたものである。そこでの評価や批判を踏まえて、現時点での著者の見解が随所に示され、一層の研究の進展に資するものとなっている。

このように本論文は、9～14世紀の日本の貿易史・文化交流史を一新したすぐれた業績である。もとより、中国人海商の主導性が強調されすぎて、時代による変化が見えにくくなっていること、日元交通が制約的な位相のみでとらえられ、経済交流の規模自体の拡大が議論に組み込まれていないことなど、不満を感じさせる部分もなくはないが、本論文の画期的な意義を損なうほどの弱点ではない。

以上より、本委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしい優れた業績として認めるものである。